

緩効性肥料を用いた促成ナスの全量基肥栽培 技術

野菜部

1 背景、目的

本県の促成ナス栽培は収穫期間が10月～翌年6月と長期間に及ぶため、一作当たり10回程度の追肥作業を行う必要があり、生産者の負担となっています。

そこで、緩効性肥料を用いた全量基肥栽培が本県の促成ナスの収量や品質に及ぼす影響を明らかにしました。

2 成果の内容、特徴

- 1) 促成ナス栽培において、全量基肥栽培の収量および品質は、追肥を行う慣行施肥栽培と同等です（図1、図2、一部データ略）。
- 2) 全量基肥栽培用肥料「促成ナス・ピーマン一発40」を用いて全量基肥栽培すると、約10回の追肥作業が不要になります。
- 3) 慣行施肥栽培において追肥に要している10a当たりの労働時間約10時間と肥料代約3～4万円を削減することができます。

3 主要なデータ・画像など

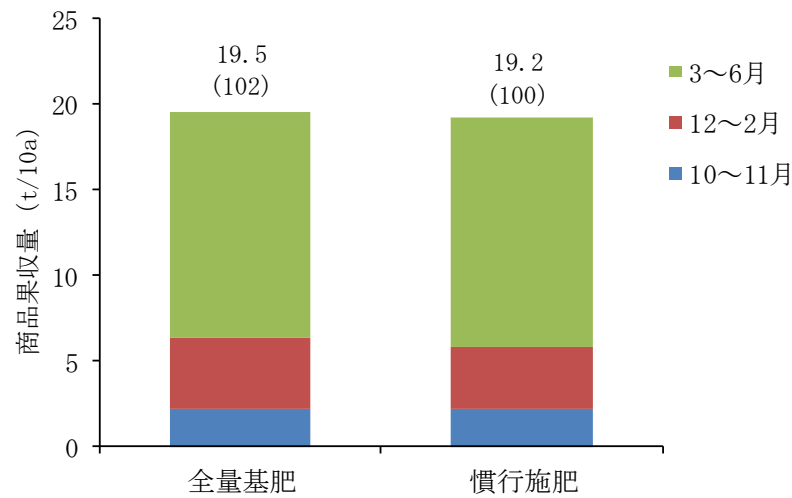


図1 異なる施肥法で栽培した場合の促成ナスの収量

- 注) 1. 品種は「省太」(台木:「トナシム」)。12cmポット苗を平成29年9月8日に定植し、V字4本仕立て、1芽採りで栽培。暖房機の加温開始温度は10℃。
 2. 定植2日前に全量基肥は「促成ナス・ピーマン一発40」400kg/10a、慣行施肥は「博多なす基肥1号」400kg/10a、「被覆化成L588」60kg/10aをそれぞれ畝内施用。慣行施肥のみ栽培期間中に「博多なす追肥」45kg/10aを10回施用。
 3. グラフ中のカッコ内は慣行施肥対比。

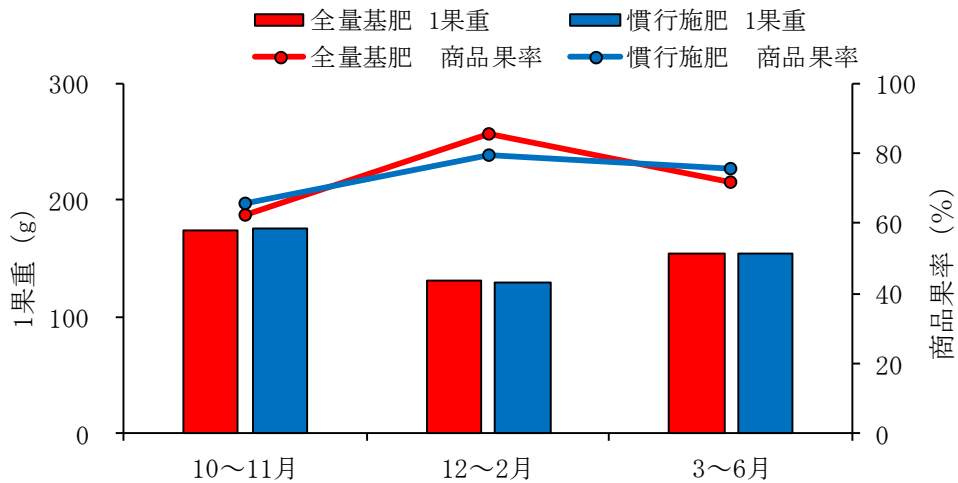


図2 異なる施肥法で栽培した促成ナスの1果重および商品果率

- 注) 1. 1果重は商品果1果当たりの果実重量。
 2. 商品果率は、総収穫果数に対する上物および中物果数(JA全農ふくれんなす部会作成の博多なす選果基準に従い分類)の割合。